

Title	二一世紀における北東アジアのキリスト教界の対話のために：「韓国におけるモルトマン受容とその理解」への応答(第二回日韓神学会議)
Author(s)	藤原, 淳賀
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.55, 2013.3 : 114-119
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4691
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

二一世紀における北東アジアのキリスト教界の対話のために

——「韓国におけるモルトマン受容とその理解」への応答

藤原 淳 賀

序

長老会神学大学校から敬愛する先方をお迎えすることができ、大変に嬉しく思っています。申玉秀教授シンオクスの韓国におけるモルトマン受容についての非常に包括的な論文から多くのことを学ばせていただきました。感謝致します。韓国においてモルトマンの影響が大きいということは以前から伺っていましたが、その状況がよくわかりました。特に保守的神学者、またリベラルな神学者に対する知的影響だけでなく、いわゆる教会指導者への——しかも趙鏞基チョウヨンギ牧師等といったカリスマ派も含んでの——影響があつたこと、また具体的かつ建設的な対話があつたことは、私にとつては新しい発見でした。大学で講じられるアカデミックな神学が、韓国において教会の実践と出会っているよき例であると思えます。韓国が経験したリバイバルが、モルトマンの神学という神学的枠組みを得て受け止められていった様子を知ることができました。また申教授の論文を読みながら、韓国におけるモルトマンの重要性を受け止め、今回の神学シンポジウムのテーマとしてモルトマンが選ばれたことの意味を改めて感じました。

モルトマンは現代を代表する重要な神学者の一人であり、その神学はスケールも大きく、また新しい方向へと人々を導くような要素を含んでいると思います。韓国では、キリスト教人口が国家人口の二〇％を越え、キリスト者の大統領や数多くの政治家、財界人を輩出し、社会的にもキリスト教が大きな影響力を持っている一方で、教会と社会の分離という二元論的な状況があり、それを越えて行くことに大きな課題を感じているような印象を、前回（二〇〇九年）の長老会神学大学校における日韓神学者会議の時に受けました。韓国の教会は、福音の純粋性を犠牲にすることなく、社会に積極的にまた建設的に関わっていくべきであるという意識を持つて公共神学（Public Theology）を熱心に論じている印象を持っています。モルトマンの組織神学・社会倫理学は聖書の神学という基礎づけの上にあり、そのうえで社会問題、環境問題を含んだ宇宙論的な広がりを持っており、その方向性においても韓国のキリスト教会に貢献をしたことと思います。

さて、モルトマンの神学を媒介として私たち日韓の神学者たちが対話をする時、社会への参与、苦難の問題、神の国と希望の神学というテーマが重要になると思います。

社会への参与

日本の主流派の教会に大きな影響を与えたのはカール・バルトの神学でした。日本においては、現在でもモルトマンよりもバルトの影響のほうが大きいと言つてよいでしょう。日本では、第二次世界大戦後多くの人々が教会に来た時代もあったのですが、全体として教会は社会から孤立する方向に向かつてきました。その理由の中に、バルト神学の神の

言葉への集中と超越的性質、また日本のバルト主義者の不適切な受け取り方の問題がありました。日本のバルト主義者は、社会問題に関わらないことがバルト的なアプローチだと考えていました。

大都市から離れた地方社会では特にこの「社会から孤立した教会」という傾向が強かったのですが、この度の東日本大震災は大きな転機となりました。教会は、なすべき当然のこととして食糧支援や泥かきを含めた被災地支援を行ってきました。これらを通して教会は、社会への関与の重要性を大きく意識しつつあります。

モルトマンの神学は、バルト神学の克服の試みと見ることも可能でしょう。韓国でも、モルトマン神学を最初に受容していったのはバルト研究者たちであったということを申教授は指摘されていますが、モルトマンを介して韓国と日本の神学的対話を考えるときに、社会への参与という視点からバルト神学をいかに捉え直していくかということが含まれてくることになるでしょう。

「苦難」の問題

モルトマンの神学の背後には、彼自身の戦後の牢獄での神の希望の経験やドイツ人としての罪悪感と苦難が大きな原動力としてあったと思います。

韓国における苦難の問題は、われわれも広く理解しているところです。二〇世紀における日本との関係における韓国の苦難、朝鮮戦争、更には古くからの近隣諸国との関係における苦難。韓国教会がモルトマンを深く受け入れられる背景にはこのような苦難の経験もあつたのではないかと思えます。私は、困難な中で苦難を正面から信仰を持って受け止めていった韓国の教会から日本の教会は多く学ぶものがあると思っています。

日本では北森嘉蔵が『神の痛みの神学』を戦後間もない一九四六年に出しました。それは神の痛みという問題を中心に扱ったという点で大変に重要であり、世界の神学的潮流における先駆的役割を果たしました。また北森の神学は日本の文化を神学に反映させた意図的に「日本的」な神学です。しかし古屋安雄教授が指摘しておられるように、北森の「痛み」には日本人としての痛みはあるのですが、日本が苦難を与えたアジア諸国の人々の苦難という視点が欠けていると言つてよいでしょう。これは、自国の文化を中心に置いて肯定的に扱おうとするとき、大きな盲点を持つことになるという例だと思えます。

聖学院大学総合研究所では、このような神学を日本化していく「日本的」神学ではなく、日本の問題を神学的に扱う「日本の神学 (theology of Japan)」という方向で研究を続けています。そこでは日本のナショナリズムを批判的に扱い、それを越えたあるべき文化の形成を考察することになります。

また北森の『神の痛みの神学』には、「痛み」への集中が強く、「復活の力」また「神の国」という要素が弱いという弱点があります。それは神の国、希望といったテーマへとわれわれを導くことになります。

「神の国」と「希望」の神学

モルトマンにとっては、『希望の神学』に明確に見られるように、バルト神学を越えていくということが大きな課題としてあつたと思います。初期モルトマンの最も大きな貢献は未来的終末論 (future eschatology) の回復と言つてよいでしょう。シュバイツァーやアルトマンが歴史的終末論を否定した一方で、モルトマンは一九六〇年代に、将来起こる出来事としての終末論を主張しました。モルトマンは、イエスの復活を将来起こる出来事の先取りとして見、万物の新

しい創造に「究極的な希望」を見ます。そして聖書の信仰をもって、来るべき「神の国」に沿うようなかたちで社会に関わっていくべきであることを主張しました。

更にモルトマンは、完全な死としての十字架と復活を主張しています。この世にあつて、新しいリアリティーに生き、社会に関わっていく教会とはどのような共同体としての性質を持つのでしょうか。これは大変に重要な問いです。⁽¹⁾

この問いは先述した「日本の神学 (theology of Japan)」の関心と重なります。教会は神の国の先取りとしての性質を生きつつ社会に規範を示し、異なつたあり方を示していくのか。教会としていかに政治の問題に関わるのか。新約聖書の「善をもって悪に打ち勝つ」というテーゼをどのように受け取るのか。これらについては様々な対話を持つ必要があると思います。しかしいずれにせよ、北東アジアにある神の国の先取りとして、日本と韓国の教会は大変に重要な役割が与えられていることは間違いありません。

一九六〇年にH・リチャード・ニーバーは以下のように指摘しています。「一九、二〇両世紀に、キリスト者はみずからを教会の成員と考えるよりは第一に、国家的、文化的社会の成員であると考え、キリスト教信仰を文明の補助物と考える誘惑に、先行するどの時代よりも強くさらされた⁽²⁾」。しかし、二一世紀においてもナシヨナリズムは、私たちが注意深くまた毅然として扱わなければならない問題です。そしてわれわれは北東アジアにおいて強烈なナシヨナリズムの高まりを現在経験しています。神の国の希望は、日本の教会に日本のナシヨナリズムを批判し新しいリアリティーを生きるように導くでしょう。それはドイツの教会、英国の教会、アメリカの教会、そして韓国の教会に対しても同様のことが言えると思います。教会が、自国のナシヨナリズムを批判し、越え出て、神の国の先取りとしての新しいリアリティーを生き、社会に健全な文化を形成していくということ。これが求められていることです。そのような意味において、神学者や牧師が指導的な役割を果たす必要があると思つています。

注

- (1) ここでは十分に論じることはできませんが、私は、ジョン・ヨーダーやスタンリー・ハワーワース、またグレン・スタツセンらが主張するような平和を作り出す性質を持った具体的な諸教会が最も重要な貢献をするであろうと考えています。Atsuyoshi Fujiwara, *Theology of Culture in a Japanese Context: A Believers' Church Perspective*. Princeton Theological Monograph Series, (Eugene, OR: Pickwick Publications, 2012).
- (2) H・R・ニーバー『啓示の意味』佐柳文男訳、教文館、三八頁。“Christians were tempted in the nineteenth and twentieth centuries, perhaps more than in most previous times, to consider themselves first of all as members of national and cultural societies rather than of the church and to turn Christian faith into an auxiliary of civilization.” H. Richard Niebuhr, *The Meaning of Revelation*, (New York, Macmillan Paperback edition: [New York: Macmillan], 1960 [1941]), p.34.